併し今日の資本として經濟界活動の原動力たる資本金を解析的に觀察するならば或は現に經濟學者の吾人に敎示するが如く祖先が廣義に於ける蓄みに依つて貯蓄された資本もあるであらう。或は朝に月を踏み夕に星を戴き晴耕雨耘、粒々辛苦より成る遺產的資本もあるであらうが今日の資本家の所有權域内に在る資本の生じたる由緒來歷は姑く別問題として資本其物は前來述べ去つた如く勞働其物が金錢財貨なるもの丶イクキヴアレントとして謂はゞ對照物即ちイクォル、ペー、フオア、イクオルウオーク（Eauaal pay for Eaual work）として現はれたもので勞働當局者（Laborer of Brawn or Brain）が其克己節約の結果たる勞働資本化の徴分（Infini te simal）を積分（Integration）して其所に纏つた資本なるものが成立つそうして斯かる資本こそ眞正なる僞らざる資本（Capital）であらねばならぬ。

予が資本といふのは勞働を根源とする積分成果たる金力を資本と謂ひたいのである。老子（Lao Tse）の所謂『貴は賤を以て本と爲し高は下を以て基となす。是を以て王侯は自ら孤寡不穀と謂ふ。此れ賤を以て本となすに非らざるか。非か。故に譽を數ふることを致せば譽無く碌々として玉の如く珞々として石の如きことを欲せず』といふ得一の眞諦を數理的に解析して述べて見たのである。果して然らば老子の謂ふが如く『昔の一を得る者は天一を得て以て淸し。地一を得て以て寧し。神一を得て以て靈なり。谷一を得て以て盈つ。萬物一を得て以て生ず。侯王一を得て以て天下の貞をなす。』の絶對觀が現代に即著して實現するのではあるまいか。從つて予は玆に祖先の掠奪鈎盗の餘慶たる資本に就ては論路を回避するのである。如何となれば論鋒一閃動もすれば現代社會階級成立、動機の論議或は現代社會組織是非の論議に脱線（Derail）する虞あるが故た假りに内田信也氏のイグノラント、マジョリチー（Ignorant Majority）を一面の實際論と信じ此問題は切り放して置くこと丶する。前に述べた通り資本なるものは勞働とイク井ヴアレントである所の零細なる資本即ち予の所謂資金徴分の積分である。つまり現實生活其物に超越した勞働なる汗水の光である即ち勞働の洗練淘汰されたものが資本である。資本なるものを假りに夜光の寶玉たる金剛石に譬ふれば勞働は未だ磨かざる荒玉の如ぎものであるまいか。其れを磨きに磨いて行つたならば初めて其所に資本として燦然たる光を放つのである。資本なるものが勞働より成立つことを原則とすることが我電氣生活主義の眞髓である。數學式を以て之れを表はせば次のやうになる。

死の悟り

吉田松陰先生が獄に下り、暴虐無道な幕吏の爲めに、小塚の露と消ゆる時、其門下の一人、品川彌次郎（後の品川子爵）に贈らた手紙に

人生十七八の死が惜ければ四十の死も惜い、四十の死が惜ければ六十の死も惜い、人間死の悟りが開ければ百に爲つてもまだ死が惜い

C…Capital 資本

L…Labor 勞働

M…Moneyremai ni ng after cost of Living 金錢（生活費支辨餘剩）

T…TiMe 時間

$$M=F(L)$$

$$\frac{dc}{dt}=M-F(L)$$

$$C=\int F(L)dt$$

此方程式に於て函數F（L）如何といふ問題が今日勞働爭議の論點であつて民度により男女の性別により年齡別に依り敎育の程度に依り其他世界の大勢に依り一概に論定を許さないもので爲政者の最も細心大膽なる研究を要する事柄だと思ふ唯一つ斷定的に絶叫せざる可らざるはCとLとの關係に於てもなる時間を一塵觸軸とする事體である。時間なるものは光陰は百代の過客なりてふ李太白の賦詞の如く隙駒再び復飯らず永平祖印の禪語の如く頭燃を救ふの底を以て感諒し如何なる善巧方便を以てするも過ぎにし一日を復び還し得ざるを徹悟し其の長を長とする所以を納得し敬虔の念を以て待遇せねはならぬことはどうしても附言して置きたい。

斯く考へ來れば今日の資本家と雖も勞働なるもの丶眞諦を悟らなければならぬ。而して今日貴ぶべき資本の餘慶に對し過古の勞働苦（或は勞働業と謂ふも可なり）を自ら省みなければならぬ。然るに喉元通れば熱さを忘れ勝なのは人情の機微で今其是非を論ふ譯でもないが前述の考へ方をば動もすれば潛在意識（Subconscionsness）すら失却して資本家が今日勞働者の自覺をラヂカル（Radical）だとかホルセーヴィーキ（Bolsheviki）だとか踏切信號の赤旗以上に危險視して餘計な色々の勞資紛糾問題を釀醱して居るやうに想はれる。資本家自らは我が爲す所に非らずと謂はんかなれど老子の獅子吼たる『爲すことなくして爲さゞる事なし』の語趣に一省すれば其の間の消息は瞭如として眼前に勃發するの觀がある、實際論に突入して我國の現狀をエーロプレーンビユー（Aero-plane view）で瞰渡せば少しく社會問題に亘る虞はあるが今日の所謂資本家なるものは全部とは無論申されないが動もすれば大多數即ちオーヴアフエルミンク、マジョリチー（Overwhelming Majolity）とも社會主義者の謂ひ相な程度に彼等の所有する資本には過古の掠奪所得に因由するものがあり相である。又掠奪收賄鈎盜等に因る所の資本を社會組織の恩澤によつて、つまり、遺產として受け得て四大五蘊丸裸に生れながらにして巨萬の富（物質的主義に於ける富）を受けた所謂果報者もあるらしい。斯るものは什麼しても頭の中に資本家といふものと勞働者といふものとの起り立つた原因を判じ得ないものがあり得る。從つて今日の所謂『資本家氣質』なるものが成立し動もすれば其弊に浸染し易い。昔から能く聽かされた話だが昔鴻池のお孃さんが番頭に向つて『小判が桝で一升位無いやうな人が此世の中にあるものでせうか』と不審顏で問ふたといふ事だ。此一茶話は雄辯に資本家の半面を語つて居るものと見られる』無論鴻池なる富豪は祖先が粒々辛苦より築き上げた眞正なる意義に於ける資本の嫡々相承けたものであらうが、其子孫になると中々勞資の眞髓までは判り兼ねるものと思はれる。而かも鴻池家は我國の資本家中に於て最も嚴肅にして神聖なる家憲を遵守し來つた尊敬を拂ふに足る古典的權威の家柄である夫れすら猶ほ斯の如き考へ閃く程だからして況んや所謂『俄分限者』『成金者流の如きは或は昔のお役人にして收賄をなして莫大の資産を得たるもの丶如きの子孫は歷代遺傳の際、子孫に黄金萬贏を遺すよりも一經を敎ふるに如かず』といふやうな遺訓が徹底し兼ねる場合の方が寧ろ『確からしさ』（Probability）が多い爲資本は勞働の汗血より成立つものであるといふ事を隔世即忘して居るやの觀あるは却つて惻隱可憐の情に堪へないものがある。又翻つて考ふるに今日の勞働者階級の人々と雖も資本家なるものは要するに自己の偉大化したるものたるを全然知らないものがあり資本家なるものは自己の進むべき軌範であるといふ點に考へ及ばないものが多數あるらしい。其玆に至つた所以を尋ぬるに或は今日の學位ある相當の智識者が叫ぶやうに社會組織一部分の變革を要する點も無きにしもあらんかなれど今現に一勞働者より大正新時代に